

令和7年度秋季特別展

越前・若狭 異国との出会いー奈良・平安時代を中心にー

島国である日本列島は、古くから海外との交流が活発でした。交流がもたらしたものは、文字、技術、政治制度や宗教など多岐におよび、古代国家の成立や人々の暮らしに大きな影響を与えてきました。越前や若狭もその例外ではありません。

今回の特別展では、奈良・平安時代における異国との交流に焦点を当て、越前・若狭地域にどのような影響を与えたのか、越前・若狭の人々がどう対峙したのかを紹介します。

1. 東アジアの変動と越前・若狭

本展の内容は7世紀後半、朝鮮半島の白村江^{はくそんこう}において、倭国^{くだけ}・百済^{しらぎ}の軍が、唐・新羅の連合軍と戦い、大敗したところから始まります。

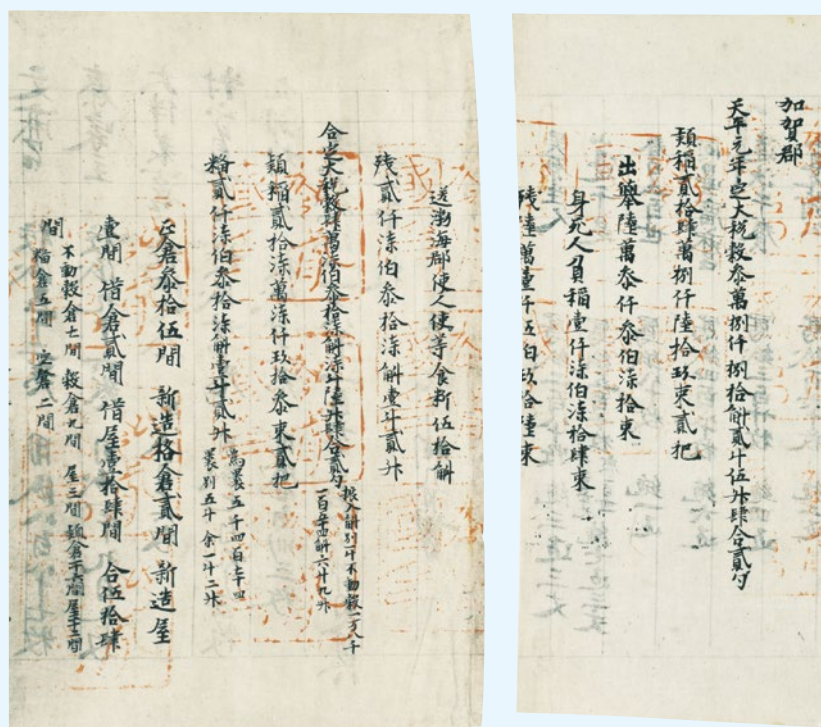
この敗戦をきっかけとして倭国は、中国の律令制度を本格的に導入して、新しい国家体制を築いていきます。それに先立って、朝鮮半島から敗走した倭国の人々は、唐や新羅から侵攻されることを恐れ、急いで防衛態勢を整えます。亡命した百済人の指導により築造された水城^{みづき}、九州や瀬戸内海沿岸を中心に配置された朝鮮式山城がそれにあたります。朝鮮式山城の一つ、大野城跡(福岡県太宰府市・大野城市・宇美町)では、百済系軒丸瓦が見つかっています。

九州には外国使節を迎える体制も整えられました。その中心となったのが大宰府です。大宰府は西海道(九州)の行政を管轄し、外国使節を

接待する役割を担いました。近年の大宰府条坊の調査では、新羅製の金属器や中国製の磁器がまとまって見つかり、8世紀から9世紀初頭にかけて国家使節を接待する「客館」という施設が置かれたことが分かってきました。

さらに、博多湾沿岸にも鴻臚館^{こうろかん}という役所が設置されました。これは、外国使節や、日本が海外に派遣した使節が出国・入国する時に滞在する場所となりました。7世紀後半から8世紀は、国家使節の往来がさかんな時代であったのです。

一方、律令制度を取り入れた国家づくりを進める中で、若狭国、越前国が史料上に現れるのは7世紀後半のことです。この頃、都から各国へ国司が派遣され統治を担いました。統治の根幹をなしたのが、中国や朝



写真①:越前国正税帳 複製(当館蔵、原品:正倉院宝物)

鮮半島から取り入れられた文字や文書による行政でした。海外の知識や技術は、都を経由して各国へ間接的に伝えられたのです。奈良の正倉院には、奈良時代の越前国で作成された公文書が所蔵されています。そのうち「越前国正税帳」(写真①)は天平2年度(730)における越前国の決算報告書です。当時越前国であった「加賀郡」の項には、「渤海郡使人を送る使い」たちに食料を支給したことが記されています。「渤海郡」とは、7世紀末から9世紀前半にかけて、現在の北朝鮮や中国東北部からロシア沿海州に存在していた国家です。この記載は、渤海から来日した使節団を本国に送り届けた日本の使節が、天平2年に加賀郡に滞在していたことを示しています。

では、渤海使を送り届けた使いたちは加賀郡のどのあたりに滞在したのでしょうか。加賀郡は現在の石川県金沢市周辺に推定されています。金沢市臨海部に立地する奈良時代から平安時代にかけての遺跡では「津司」(港を管理する役所か)や「宿家」(滞在するための宿舎か)と記された土器が見つかっており、「渤海郡使人を送る使い」が到着した港の遺跡である可能性が指摘されています。

このほか、渤海への使節が利用した港として、『続日本紀』には三国湊が登場します。越前国には、異国

との出会いの場が形成されていたのです。

2. 海商の往来と越前・若狭

平安時代に入ると、日本と唐・新羅の間で国家使節の往来が少なくなってきます。対して唐や新羅からの商人が九州に現れはじめます。商人たちは鴻臚館に滞在し、貿易を行いました。

鴻臚館跡(福岡県福岡市)の発掘調査では輸入された陶磁器類が大量に見つかっており、新羅製の土器や、中国各地の窯で生産された磁器、遠くイスラム圏からもたらされた陶器まで多岐に及びます。

一方、日本海側には渤海使の来航が続きます。渤海使はもっぱら貿易目的で来日しており、北方産の動物の毛皮や、暦などをもたらししました。渤海使の来航に対応するように、能登国には能登客院、越前国には松原客館が置かれました。

10世紀に入ると、東アジアの情勢が変化します。唐が滅亡し中国大陆では五代十国といわれる戦乱の時代に入ります。新羅や渤海も滅亡します。やがて宋(北宋)が成立し、中国大陆をほぼ統一すると、日本海沿岸にも宋人の来航がみられるようになります。その端緒となったのが朱仁聡という人物です。彼は長徳元年(995)に若狭に来航し、ほどなく敦賀に移されます。



写真②: 松崎天神縁起絵巻(防府天満宮蔵、重要文化財)

そのときに越前守として赴任したのが藤原為時(紫式部の父)です。宋人の来航は、当時の貴族も注目していたようで、藤原行成の『権記』^{ごんき}には、朱仁聡の動向が詳しく記されています。漢詩集『本朝麗藻』や中国の歴史書『宋史』にも記録が残っており、貿易や漢詩のやりとりが行われたようです。

敦賀に滞在していた朱仁聡を訪ねた人物のなかに、源信という人物がいました。彼は京都・延暦寺の僧侶であり、『往生要集』をあらわしたことで有名です。鎌倉時代末期に成立した仏教史書『元亨釈書』には、源信が朱仁聡と敦賀で対面したときの様子が描かれています。宋人と有力寺院との交流を示す興味深いエピソードです。宋の商人にとって、主な貿易相手は都の貴族や有力寺社でした。

朱仁聡の来航以降、11世紀後半から12世紀前半にかけて、宋商人が日本海沿岸、特に若狭や越前に来航する例がみられるようになります。彼らからすると、京都に近い若狭や敦賀に来航した方が貿易を進めるうえで有利であったのでしょう。

さて、貿易で得られた品々は、どのように享受されていたのでしょうか。ここで鎌倉時代末期に制作された『松崎天神縁起絵巻』^{まつざきてんじんえんぎ えまき}を見てみましょう。本品は菅原道真の生涯とその霊験について描かれた絵巻物です。ここには、承保2年(1075)のこととして、「大国の受領」^{ずりょう}播磨守有忠のくらしの様子が描かれています。豪華な調度品や献上品に囲まれながら、有忠は太刀を愛でて、その妻は筆をとって書き物をしています。部屋の中央に青磁の瓶が置かれているのは、異国の陶磁器が有忠の財力を示すもの、いわば富の象徴であったと考えられていたからです。

越前国は播磨国と同じ「大国」と位置付けられる国であることを考えると、貿易の場となった越前の国司や在地の有力者も異国からの品々に囲まれた生活をしていただことが推測されます。

3. 宋人来航の終わりと越前・若狭

12世紀前半には、東アジアでは女真族の建国した金が台頭し、北宋を滅ぼすなどの変動が起きています。時を同じくして宋人の日本海沿岸への来航も史料上から姿を消します。しかし、発掘調査の成果を参考にと、史料とは違う様子もみられます。

古代・中世の集落遺跡である家久遺跡(越前市)で

は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて営まれたお墓が見つかりました。礫を敷き、積み上げた礫槨墓^{れきかくぼ}といわれる墓から副葬品が出土しました。烏帽子や太刀、墨・筆といった文房具など多岐にわたりますが、その中に白磁四耳壺(写真③)や中国製の石硯がみられます。

続いて深山寺経塚(敦賀市)では、青白磁の合子や碗とともに中国製の鏡(湖州鏡)が見つかっています。当経塚は気比神宮に近く、気比社の関係者が経塚造営に携わったと考えられています。

また、敦賀から山を越えた近江国北部、塩津港遺跡(滋賀県長浜市)では平安時代末期の神社や港が見つかっています。海上での安全を祈る木札や、陶磁器などがみつかっており、異国の品々が日本海経由でもたらされた可能性があります。

宋人の来航が途絶えたはずの日本海沿岸には、その後も異国の品々がもたらされていたようです。

7世紀後半から12世紀までの長きにわたり、東アジア情勢の変化、人とモノの往来の中で、越前・若狭は異国との出会いの場となりました。本展では、異国との交流を示す品々をご覧になりながら、奈良・平安時代の越前・若狭に思いをはせていただければ幸いです。



写真③: 白磁四耳壺(越前市教育委員会蔵、越前市指定文化財)

令和3年度より、福井新聞に福井県の文化施設の職員が寄稿しています。福井県立歴史博物館の学芸員は、新聞に月に1回掲載される「歴史の扉」欄で、日々の調査の中での発見や展覧会の見どころなどを執筆しています。福井新聞社より「歴史の扉」の画像提供とご協力を得て、過去に掲載された「歴史の扉」を紹介させていただきます。

令和6年(2024年)11月23日(土曜日)

県立歴史博物館には、資料の保管状況そのものを展示しているオープン収蔵庫というコーナーがあります。福井県内で使われていた道具類を中心に展示しています。その中に旧今立町出身の山田保治が収集し



日常に寄り添う「美」



た「山田保治民藝コレクション」があります。山田保治は明治21年(1888年)に生まれ、京都帝国大学で昆虫の研究をしていました。法隆寺が所蔵する国宝「玉虫厨子」に使われているタマムシの調査を

したことで有名ですが、実は工芸品のコレクターとしても知られた人でした。昆虫採集に行く先々で陶磁器や木工品、絵画などを集めおおよそ280点もの「山田保治民藝コレクション」を形成しました。昆虫学者であ

る山田が工芸品の収集にのめり込んだのは、とある人物との出会いがきっかけでした。その人物とは柳宗悦です。柳は、それまで注目されてこなかった身近な道具が持つ美を見いだして民藝運動を提唱した人物です。それまで「美しい」とされていたものは、有名な芸術家により高貴な人やお金持ちのために作られた高価で鑑賞を目的とした美術作品ばかりでした。一方、民藝運動では無名の職人が民衆のために安く大量に作った素材で実用的な生活必需品を「民衆



今回の寄稿は…
一瀬諒学芸員
(美術史学)

令和7年(2025年)3月15日(土曜日)

日本では、今も昔も米は食事に欠かせないものです。ところが、令和6年(2024年)の夏ごろから「米不足」という言葉をよく聞くようになりました。理由として、気候変動の影響や海外からの観光客が増えたこ



江戸時代の米作り技術



江戸時代の米作りを写した人々(四季耕作図巻) 部分 県立歴史博物館蔵

と、米を作る人が減ったことなどが挙げられています。ここで、改めて米作りの歴史について考え

てみたいと思います。現在の米作りは、コンバインやトラクター、ドローンなど、さまざまな機械が使われています。では、機械がない150年以上前の江戸時代には、どのように米作りは行われていたのでしょうか。それを知

るために、江戸時代の米作りに関する資料を調べました。江戸時代には全国各地で描かれた屏風や絵巻、襖や陶磁器などに見られます。その絵から江戸時代の人々は①牛や馬の力を借りて、②大人数で作業していること③鎌や鋤、水車など、さまざまな人力の道具を使っていることがわかります。また重労働にもかかわらず、作業をする人々に笑顔が多い点も目を引きま



今回の寄稿は…
伊藤大生学芸員
(歴史地理学)

令和7年(2025年)4月5日(土曜日)



県立歴史博物館では毎年特別展を開催しており、県内外の多くの人が見に來られます。ときには展覧会でとりあげた歴史上の人物にゆかりのある方が來館され、思いがけず貴重な話が聞けることもしばしばです。

2023年に担当した



瀧川忠征書状(個人蔵)

展覧会から新たな縁

柴田勝家の特別展では、勝家ゆかりの方が福井県から來館されました。そして、長崎県の五島にも勝家の子孫と伝えられる方がいると教えていただきました。早速、その方に連絡を取り、驚きの古文書を見せていただくことができました。

その古文書は未公表の新出資料で、江戸時代初期の一次史料(その当時に記された史料)で信頼性の高いものでした。尾張藩(愛知県)の家老を務めた瀧川忠征から、長崎

県平戸の光明寺に宛てた手紙で、通もありません。光明寺の住職は「空」とい、勝家の子孫と伝承されています。了空の縁者が五島に住みこの古文書を伝えました。

古文書によれば寛永年間(1624~44年)、瀧川忠征は了空と頻りに書状や贈り物のやりとりをし、了空の体調や動向を気にかけ、ときには面談をしていました。また、平戸藩主三代の松浦隆信と懇意にし、了空の情報を伝えていました。それを受けた隆信も了空の特権を認め、了空を厚く保護しました。



今回の寄稿は…
大河内勇介学芸員
(日本中世史)

者との密接な関係が読み取れます。ではなぜ、瀧川忠征はこれほどまでに了空を支援したのか。この点は、古文書に直接記されていない。しかし、他の一次史料では忠征の主君である瀧川一益と、柴田勝家との間で縁組があったことは確実です。二人とも織田信長の重臣として有名ですね。したがって、了空は瀧川家と柴田家の双方と縁のある人物の

令和7年(2025年)6月14日(土曜日)



「今から80年前まで、日本は戦争をしていました。どこの国と戦争をしていたか知っていますか?」。校外学習で歴史博物館を訪れる小学校低学年の皆さんに、説明のなかで聞かせることがあります。それぞれ知っ

福井、敦賀を焼いた空襲



空襲によって炎上する建物の内部

ア・太平洋戦争が終わってから80年の節目の年です。この戦争の中でゲアム、サイパン、テニアンなどのマリアナ諸島の島々が、アメリカ軍によって占領されたのは、1944年(昭和19年)の7月から8月にかけてのことです。その後、アメリカ軍は、マリアナ諸島から日本本土への空襲を始めました。

福井県内では、敦賀市と福井市が大きな空襲を受けています。敦賀市への空襲は、1945年7月12日の深夜から行われました。これは日本海側の都市に対する初めの空襲によって炎上する建物の内部



今回の寄稿は…
橋本紘希学芸員
(近現代史)

ての大規模な空襲で、100人以上が亡くなり、当時の敦賀市内の家屋の約70%が焼けました。敦賀空襲の7日後の7月19日には、福井市が空襲を受けました。福井空襲は、午後11時過ぎから81分間にわたって行われ、1万発近くの焼夷弾が降り注ぎ、福井市街地の85%を焼き尽くしました。この空襲による死者は150人以上に及びました。

福井県立歴史博物館には、様々な専門の学芸員がおり、日々、資料整理や調査研究、展覧会、講座などの仕事をしています。『ふくいミュージアム』No.71・72の全2回に分けて、当館の学芸員8人をご紹介します。本号では4人をご紹介します。



文化財調査員

さか い けん じ
酒井 健治

歴史学
専門：日本古代史

【自己紹介】

平成27年の採用以来、若狭歴史博物館、一乗谷朝倉氏遺跡博物館、そして歴史博物館と、3つの県立館を渡り歩いてきました。専門は奈良・平安時代の対外交渉史で、考古学の成果も援用しつつ調査・研究をしています。

古代といえば史料が少なく、謎やロマンといった言葉で語られがちです。しかし、当時の記録をよく読んでみると人々のリアルな息づかいが垣間見ることがあります。そんな古代史の魅力を皆様にお伝えできればと思います。



韓国・慶州の皇龍寺址にて物思いにふける

【これまでの活動】

- 県立若狭歴史博物館 特別展「海と山の美しもの～食がたぐ若狭と都～」(令和元年10月5日～11月4日)
- 県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館の展示整備(令和2～4年)

基本展示「戦国城下町 一乗谷の暮らし」の展示に関わりました。



学芸員

おお こう ち ゆう すけ
大河内 勇介

歴史学
専門：日本中世史

【自己紹介】

福井へ来て10年、当館に異動して6年が経ちました。当館では、戦国時代や幕末という二大激動期の政治史に関する展示を5回ほど担当してきましたが、実は、専門は鎌倉時代～戦国時代の村落文書の研究です。今後は、その知見や魅力をお伝えしつつ、最新の文化財保存の方法も勉強できればと考えています。



【これまでの活動】

- 特別展「幕末維新の激動と福井—近代日本の夜明け前、福井が描いた国の姿—」(平成30年)
- 特別展「天下人の時代—信長・秀吉・家康と越前—」(令和2年)
- 企画展「戦国越前の謎を解く—真柄十郎左衛門の正体など—」(令和3～4年)
- 特別展「『鬼柴田』勝家の実像—武勇と統治に長けた忠義の臣—」(令和5年)
- 特別展「『天下人の子』結城秀康と一族・家臣」(令和6年)



学芸員

いとう だい き
伊藤 大生

歴史地理学
専門：景観史

【自己紹介】

今日の前に広がる景色がどのようにできたのか、今と昔の地図や写真、文書などを用いて研究しています。見慣れた当たり前の景色も、それは自然環境と地域の人々の暮らしの積み重ねによってできています。景色を入口に、皆様の住む地域や、そこに生きた人々の歴史の奥深さや魅力をお伝えすることで、皆様の人生がより豊かになる手助けができれば幸いです。



現在の九頭竜川下流と堤防の景色



堤防ができる前の景色

【今調べていること】

現在、九頭竜川下流には堤防がありますが、かつてはなく、水が毎年あふれていました。

また、川沿いの地域の人々の中には、堤防に反対する人もいました。

かつて人々はどのように暮らし、その後どのように現在の景色ができたのでしょうか。

◀(2万分1仮製図(明治32年(1899)頃、当館蔵、白い部分は畑、点線は小道を示しています。)

【これまでの活動】

- 特別展「景色の歴史をたどる―絵図・地図からみる越前若狭のまちとむら―」(令和3年)
- 写真展「ふくいのみち並み今昔」(令和3年)
- 写真展「商店街の風景」(令和4年)
- 特別展「描かれた川と人々―越前・若狭の利水の歴史―」(令和5年)
- 企画展「江戸時代の米作り―越前国を中心に―」(令和7年)



学芸員

こう ぐち ゆう
高口 柚

美術工芸
専門：仏教美術(主に仏像)

【自己紹介】

地域のお寺・神社に出かけて、祀られている仏像を拝見し、調査で得られことをもとに研究を進めています。調査では、形や構造を記録して写真撮影をします。像の特徴から、背景にある信仰に迫り、その魅力をお伝えできるよう努めています。

調査させていただける機会があれば、お気軽にお声掛けください。



調査の様子

【これまでの活動】

- 特別展 令和6年(2024)9月21日～11月4日
「越前の禅文化～大本山永平寺の文化財を中心に～」
第三章 ほとけの姿



展示室の様子

- 講座 令和6年(2024)10月6日
ふくい歴博講座「永平寺の仏像～山門上の江戸時代彫刻～」(福井県立歴史博物館 1階講堂)

「昭和のあそび」

ミュージアム・サポーターズクラブ主催
「体験！昭和のあそび～春編～」

[日 時] 令和7年5月5日(月・祝)

手形で鯉のぼり作りや、こま回し、わら編みの体験を行いました。



◀昭和のあそびの様子

古文書解読講座

「「地味」な北庄城主
丹羽長重の古文書2通を読む」

[日 時] 令和7年6月21日(土)

14:00～15:30

[講 師] 大河内勇介(当館学芸員)



古文書解読講座の様子▶

歴博講座

「越前・若狭やきものの旅ガイドツアー」

[日 時] 令和7年8月3日(日)

14:00～15:30

[講 師] 一瀬 諒(当館学芸員)



◀歴博講座の様子

令和7年10月～の催し物案内

秋季特別展

「越前・若狭 異国との出会い ～奈良・平安時代を中心に～」

開催期間：令和7年10月18日(土)～11月24日(月・振替休日)

※会期中休館日 11月5日(水)

観 覧 料：一般400円 大学・高校生300円

小中学生・70歳以上の方200円

■写真展「写真でめぐるみなとまち」

[場 所] 1F エントランスギャラリー

[日 時] 令和7年9月4日(木)～

令和8年2月11日(水・祝)

※休館日をご確認ください。

■記念講演会

[日 時] 令和7年11月2日(日)

14:00～15:30

[定 員] 160名 1階講堂にて

[タイトル] 東アジア交流史からみた藤原為時・
紫式部の越前国来訪

—なぜ、為時は紫式部と越前国に来たのか?—

[講 演 者] 新潟大学大学院講師 篠崎敦史氏

■外部講師による関連講座

[日 時] 令和7年11月8日(土)

14:00～15:30

[定 員] 160名 1階講堂にて

[タイトル] 平安時代の『アマビエ』? = 人面墨書土器
—古代にもあったパンデミック—

[講 演 者] 元福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長 赤澤徳明氏

担当学芸員による「ふくい歴博講座」

令和7年11月16日(日) 14:00～15:30

定 員：160名 1F 講堂にて

タイトル：古代越前・若狭の港と異国のの人々

※記念講演会、講座は、1か月前より

電話(0776-22-4675)で事前申し込み